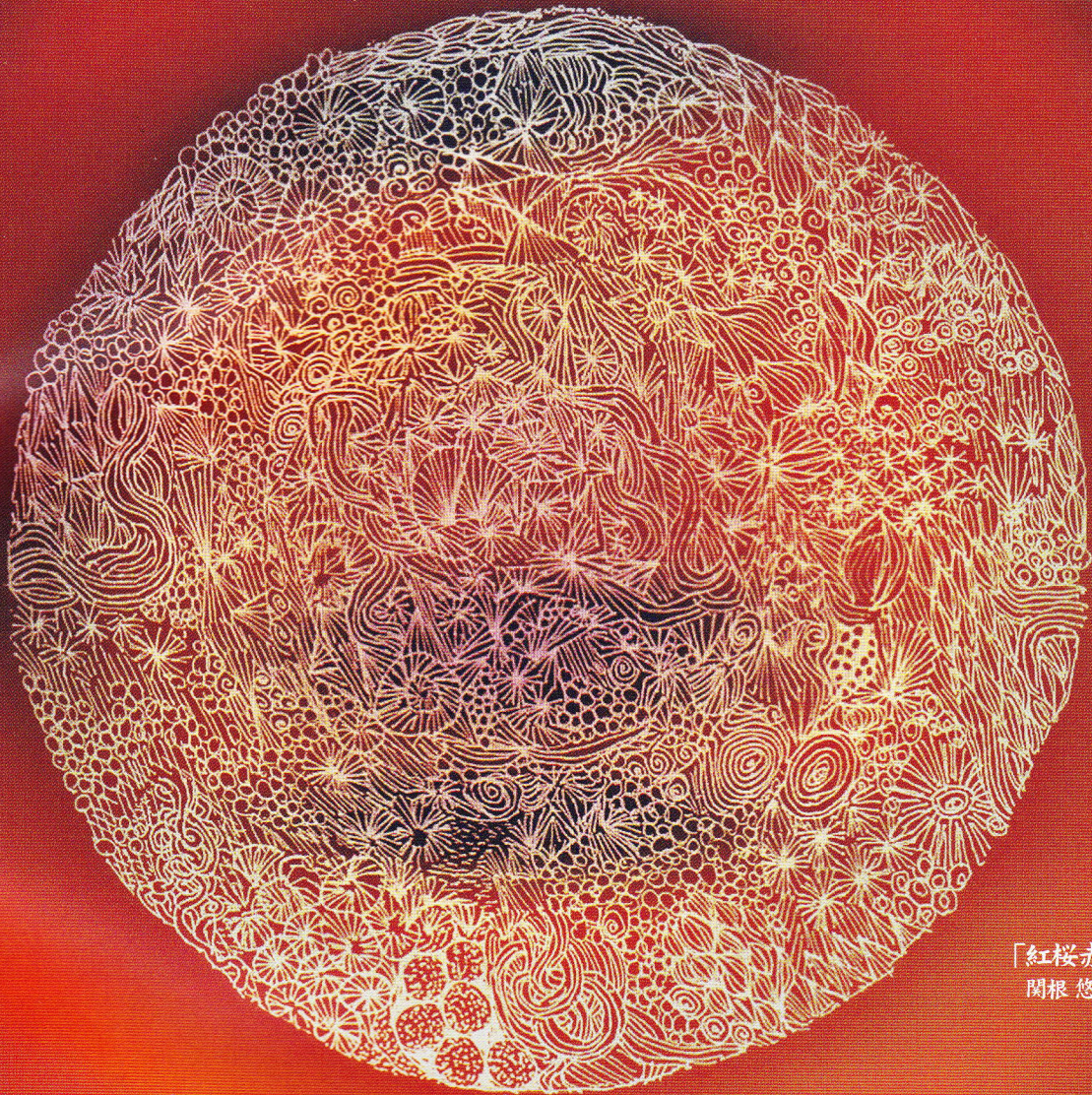


ハロー山梨演劇塾「YaYaYa」第14回公演

お賽銭で・・・今夜は焼き肉ねっ！



「紅桜赤月」
関根 悠一郎

作・演出/藤谷 清六

スタッフ

作・演出/藤谷 清六 演出助手/塚田 仁・島津 久美子 舞台監督/清野 知之 舞台監督助手/鷹野 亮司 照明/飯野 洋光 美術/笹本 正明
メイク/田中 来実 ヘアメイク/小林 淑子 衣装/鎌倉 博美 大道具/高橋 誠 映像・DVD制作/鷹野 亮司 音響/丹沢 昌貴・加賀美 瞬
録音/iB Music School 池本 寛 宣伝・デザイン/山中 みゆき スチール写真/山中 勲 制作/松永 博美・井口 ちえ
協賛/(株)明治書房 守屋 杉男 挿絵/関根 悠一郎 プロデューサー/山本 眞樹

★2014年11月29日(土)

昼公演/13:30開場 14:00開演 夜公演/18:00開場 18:30開演

★2014年11月30日(日) 昼公演/13:30開場 14:00開演

★場所: 甲府桜座 <http://www.sakuraza.jp> ★特別支援企業:(株)明治書房

★入場料: 前売券 2,000円 当日券 2,500円 (全席自由) (中・高生 1,000円 / 小学生以下無料)

★お問い合わせ: 土井 マチ子: 090-4932-8147 E-mail: kuninakadoi063@docomo.ne.jp

藤谷 清六: 090-3244-8006 E-mail: maki@mozidas.co.jp

「脚本を読んで」

『マタイによる福音書』の第15章はイエス・キリスト逮捕の場面である。

「そこでピラトはまた彼らに言った、『それでは、おまえたちがユダヤ人の王と呼んでいるあの人は、どうしたらよいか』。彼らは、また叫んだ、『十字架につけよ』。ピラトは言った、『あの人は、いったい、どんな悪事をしたのか』。すると、彼らは一そう激しく叫んで、『十字架につけよ』と言った。それで、ピラトは群衆を満足させようと思って、バラバをゆるしてやり、イエスをむち打ったのち、十字架につけるために引きわたした。」

ここにバラバとは暴動を起こした極悪な殺人犯だったという。当時のイスラエルでは過越の祭（ペサハ）の処刑の際には「群衆」が願い出た一人を許してやる慣習があった。この選択に当たって「群衆」はなんとキリストではなく人殺しのバラバの方を選んだのである。

時代は下って21世紀の今、「群衆」は国民国家の「国民」となって一国の民主主義の主体として現代政治にコミットしている。その「現代人」と、バラバを選んだ紀元一世紀のイスラエルの「群衆」の間には確たる「進化」が認められるだろうか？「現代人」は間違いなくバラバを処刑し、キリストを救済するだろうか？間違ってもキリストを十字架につけるような愚挙はしないだろうか？

藤谷清六『お賽銭で……今夜は焼き肉ねっ!』に出てくる「民衆」を見ているといささか心もとなくなってくるのだが・



山梨県立大学 学長
伊藤 洋

「堪えなければならぬかなしみ」

かの高名な野党党首兼大阪市長は、文楽へ支給する助成金を「ムダだ」といって廃止しようとした。おどろいた文楽関係者は、大阪市長へチケットを贈り「まずは文楽を鑑賞してみてください。文楽は素晴らしい伝統芸能なのです」と嘆願した。鑑賞後、大阪市長は「観たけど、つまらなかった」と言っただけ、予定通り助成金の支給を廃止してしまった。その大阪市長が観劇した際、上演された演目が、曾根崎心中なのである。

曾根崎心中は文楽の中でも一番の人気演目、いわばテッパンネタだったが、芸術を知らない大阪市長に冷言をあげられ、さぞかし文楽関係者は、かなしく、むなしい思いを味わったことだろう。文楽関係者が味わったむなしさ、かなしみは、この舞台の旅芸人が味わったものと、まったく同じであったことだろう。いや、旅芸人が味わったのは、もっと深い絶望感だったか。なぜなら「つまらなかった」とさえ、言ってもらえなかったのだから。表現者にとって、もっともこたえる仕打ちは「無視」である。

このむなしさ、かなしみ、絶望感ならば、僕もよく知っている。芸術を知らない大衆、権力者があふれる今の時代に、表現者は誰でも、このことのむなしさ、かなしみ、絶望感に堪えながら、表現活動を持続しなければならない。



日本画家
筈本 正明

「走れ、藤谷さん」

芝居づくりは実にしんどい作業だと私は思います。

肉体労働だと言い切る人もいますが。多分、藤谷さんもしんどいと感じている独りだと思います。そんな芝居づくりに拘り、狂奔する藤谷さんという人は、タフなおそろしい長距離ランナーです。

現在の演劇事情の中、藤谷清六というプロデューサーは、自ら作品を書き、集団を構えずに、役者を集め演出する。古希を過ぎても、なお、こんなしんどいことをやり続ける人は見当たらない。思うに、陰で支える信頼できるサポーターがいるのだろう。改めて私は藤谷さんの人脈の幅の広さに脱帽する。

さて、藤谷作品の魅力の一つは時代を鋭く切りまくる旺盛な批評精神だろう。その精神は軽妙なタッチで快く台詞の随所にしこまれ痛快で爽やかだ。

もう一つの魅力は、作品の根底に響き渡る「命の誕生の賛歌」であろう。これが作品の支える芯になっている。

それから、もう一つは観客を楽しませることに腐心する演出家藤谷さんの手さばきだ。時には過剰で痛々しさを感じることもあるが……。

サービス精神旺盛な清六さん。すぐに息切れする同世代の私達に構わずに走り続けてほしい。



シアターガイア主宰 (演出家)
水田 拓



ピエロ 榎貝 孝弘



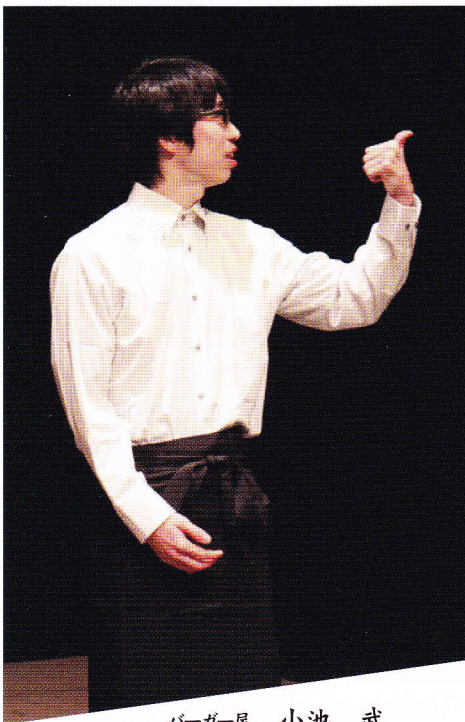
おさん ひゆか





店の客A 萩野シゲ子

店の客B 佐藤 真佐美



バーガー屋 小池 武



八百フジの女将 高畑 美登里



ウェイトレス きむち